

Guest Editor :

江原 茂

EBMの実践と研究のストラテジーの特集第2弾は、画像診断およびIVRのガイドラインとエビデンス作成のための方策に関する総論の4部作である。画像診断を標準化し、レベルの高いエビデンスを創出し、それをガイドラインに結びつけることは、時間と手間のかかる作業である。残念ながら、現在の医科大学臨床系講座の多くは日常臨床で手一杯で、レベルの高い臨床研究を行う余裕のあるところは少ない。しかし、このような試みを活発化させることなしに画像診断・IVRの将来は楽観できない。現実には様々な分野で画像診断やIVRの専門家の意見が反映されていないガイドラインが存在する。またエビデンスを準備しないで、現場の状況を改善しようとする場合には多くのエネルギーを必要とすることが少なくない。我々が目指すべきは、放射線診断医・IVR医に有用な武器としてのEBM、すなわちevidence-based radiologyの創出である。

エビデンスの質を上げより実践に役立てることは、画像診断・IVRが単なる便利な道具以上の体系を持つ科学に近づくことができるかどうかの別れ道である。客観的であるはずの画像診断は本来その中では最右翼に位置するはずである。しかし、画像診断はおそらく特別な工夫なしに客観性を示せる分野であっただけに、エビデンスを蓄積させることを意識的に実践する点においては必ずしも他分野に先行していた訳ではない。IVRも同様かもしれない。また技術的な要素が大きく関わる分野ではさらに、適応や手技の標準化への努力が重要な意味をもってくる。IVRでも良質のエビデンスを得るためのさらなる努力が必要である。

今日EBMとエビデンス作成に関わる情報は多く、画像診断やIVRの領域に限定しなければすでに多くの出版物が存在する。ランダム化対照試験で多くのエビデンスを構築することは現実的ではないものの、従来型の症例シリーズでの限界は明らかである。エビデンスのレベルを少しでも向上させ、データを更なる解析に生かせるようにするには、知識と工夫が必要となる。エビデンスを実際に作り出すには時間のかかる地道な研究活動が必要であるが、今日の状況ではそれなくしては更なる発展は望み得ない状況にあると言わなければならない。エビデンスの創出を活性化させる取り組みが求められている。

(岩手医科大学 放射線医学講座)